

The Open Group MUNICH Conference ハイライト 第一日目

- * 開催日時: 2008年10月20日(月)～10月22日(水)
- * 開催場所: Arabella Sheraton Grand Hotel Munchen

- * OPEN GROUP Conference in MUNICH
<http://www.opengroup.org/munich2008/>

<第1日目ハイライト>

The Open Group の第 20 回 Enterprise Architecture Practitioners Conference は 10月20日(月)、ドイツ ミュンヘンの Arabella Sheraton Grand ホテルにて開催された。コンファレンスには、数百人のメンバがテーマである“セキュア・アーキテクチャ”をディスカッションすべく、ホテルのボール・ルームに良く晴れた早朝から集まった。今週のコンファレンスにおけるテーマ・トラックでは、オープンでグローバルなネットワークの世界において高揚するビジネス・デマンドに合致するセキュアな IT オペレーションのための安全でセキュアなエンタープライズ・アーキテクチャと効果的な情報セキュリティ・インフラの構築に焦点が当てられる。アンケート投票結果は下記サイト。
http://www.opengroup.org/public/member/proceedings/q408/OG_EAPC_Munich_Polling_Day_1.pdf

先ず、Allen Brown 氏、President and CEO, The Open Group が、“Secure Architecture”の本日の開始に際して、ドイツ語で参加メンバの皆様に心から歓迎の意を表した。Brown 氏は、簡単な調査を行った結果、今週のコンファレンスの参加者の大部分がヨーロッパや英国からであり、参加者の約 77%が The Open Group のメンバであると述べた。(更なる調査については、各セッションに続いて行われ、調査結果は下記を参照)

Brown 氏のオープンニングに続き、午前のプレナリ・セッションは、Carsten Casper 氏、Director,artner Research の“The Emergence of an Adaptive Security Infrastructure in a Web 2.0 World”というテーマで基調講演が行われた。氏によると、従来の情報セキュリティは本質的にかなり受動的 (reactive) であったが、今日ではセキュリティの評価は、予防的なものであるとともに、適合性を持ち変化する脅威やビジネス・ニーズに適應するものでなければならない。ベンダやユーザは問題が起きた時に非難される。理由は、両方とも古風なセキュリティ対策に陥りがちであるからである。今日、IT インフラ

はあまりにも多くのコンポーネントから構成されており、組織内に格納された状態になり、従ってコントロールが難しくなってきた。外部からの脅威を防ぐために、“我々”対“彼等”という意識よりも組織としては、レイヤー毎に適応する方法でセキュリティに焦点当てるべきである。理想的なアプローチとしては、脅威に打ち勝つために状況に合ったものを利用した新しいアプローチとレガシー・システム（人的システムに影響を与えない）とを組み合わせた体験した方策をセキュリティ・レベルに採用することである。セキュリティの改善に関する進言としては次の事柄が含まれる：昨日よりも今日の脅威を重視する；もつと果敢にベンダとともにより良いソリューションと製品を追求する；そして、リスクを完全に除去できる可能性のありそうな非現実的なことを信ずるよりもそれを如何にしてマネージすることを学びリスクに対処するかに変えたほうが良い。

次のセッションでは、Aaldert Hofman 氏、Security Architect at Capgemini が“Building the Trust Framework with Multi-level Trust Models”というテーマで講演した。氏は、トラストという言葉を用意決定の結果として定義し、特定の属性にもとづいた、大変重要な特定の資産（例えば、情報）のリスクに対するものであるという。トラストはいつも時とともに変化するものであり、セキュア・トラスト・レベルは最初に確立し、動きをもとにいつも適合性を持たせておかなければならない。それでは、最初の段階でトラストはどのように確立しておくのか？

Identity trust の構築は、特定の人物証明書や参加する団体間の関係にもとづいて可能であり、identity の格納は確実に行われ、最終的に特定の登録メカニズムとプロセスが行われる。トラスト・レベルはいとも簡単に設定されるが、トラスト・レベルを実際に設定するには複雑な課題があり、実体に対して特定のアクションを実行ために信頼できるか否か判断するためのビジネス知識やインプットを必要とする。

マルチレベルのトラスト・レベル・モデルは、トラスト・レベルを管理すると同時に、もしトラスト・レベルが確立されたならばその実体に対して特定のアクションを許可することを進言する。トラストを規制するために、氏は、トラスト・ドメインの使用と、そのドメインには特定のトラスト権限者により決められ、実施される共通のトラスト・ポリシーを含むことを進言した。

午前中の最後のセッションは、Steve Whitlock 氏、Chief Strategist Information Security Architect for Boeing が“Gemini Dream: Can the Twins save Our Data?”という創造的テーマで講演した。氏は、情報リスクの課題について話した。氏により定義されたように、‘twin’ インフォメーションの課題は、デジタル著作権管理とメタ情報管理である。データ保護について歴史的見地から、象形文字の印刷の紹介から暗号

化とコンピュータ自動化について話された。氏は、情報の価値は物理的な物の価値よりも益々その価値が大きくなってきて、逆に情報はオープンになり盗みが増加し、脅威が発見し難くなってきている。

データが最もリスクが高く、データがそっと置かれている状態から動いた時に、情報を取り囲んでいた防御柵が脆弱となる。これらの脆弱性のために、デジタル著作権とメタ情報が必要となる。さらに次の進言をされた:はじめにプライベート・キイにより保護された著作権;著作権標準の作成;そしてメタ情報の作成により安定した、スケーラブルでワークフロー・ライフサイクルをフォローし、コラボレーションをサポートすること。

午後のセッションは、Academia & EA、The EA Life Cycle, Security の3つのトラックで行われた。

The EA Cycleトラックでは、Jason Uppal 氏、Chief Architect, QRS がディスカッションとプレゼンテーションのホストを務めた。テーマは、1)実行可能なエンタープライズ・アーキテクチャを如何に作るか。2)如何にして他の分野の手法、ポトフォリオ管理やプロジェクト管理、ITSM や Organization Effectiveness、変更管理のような手法、についてであった。

Jason Uppal 氏は、TOGAF を他のすべて手法と共に使用するべく共通の語彙を作成する必要があると述べ、他の手法についての深い理解と能力をもつべきであると、強調した。他の手法とは、PMI と Prince 2 のプロジェクト管理、ITIL と ITSM その他である。

Alex Schoijett 氏、Rogers Communications が、Rogers のビジネスが変化する中で、どのようにエンタープライズ・アーキテクチャを策定したか経験談を話した。

Kell G e Kvist 氏、Dong が Dong の EA の実践と EA の実践が機動した結果を受けて、組織変更管理を行った。

Klaus Nieman 氏、ACT Consulting は、EA 実践の経験談と EA 成果物としてメタ・データを策定した。

このディスカッション・セッションは、EA プラクティショナ同士が夫々の経験談の交換を継続し、相互に共有して行くが重要であることを確認し終了した。また、他の実践経験なしでは、EA 実践活動は継続できないことを全員合意した。

Academia & EAトラックでは、Eric Boulay 氏、President Director General & CEO of Arismore が2つのパネルディスカッションの司会を行い、EA 実践を行っていく上で、大学と業界が協業していく必要があると話し、議論は、EA はサイエンスであり、それはビジネスかあるいは学問か？の話題に集中した。また、セッションのグループは、企業内と同様に大学でも、情報や知的資産を共有することは大きな動機づけになると議論した。このトラックの“Round Table on Academic Organization & The Open Group”では、Len Fehskens 氏、VP & Global Profession Lead, The Open Group が Boulay 氏と共に、大学において如何にして EA 教育、トレーニングを行っていくかを議論した。

Fehskens 氏によれば、アーキテクト達は EA 社会においてコンピューティング・スキルよりビジネス・スキルのニーズの方が高いという。大学において、何とかしてEAを教えることが出来ないかとの数多くの質問が出された。大学では、EA 教育や理論的知識を教えることはできるが、エンタープライズ・アーキテクトになるためには、実世界での専門家として実践的知識とその本質をトレーニングするとは困難であるということがコンセンサスであった。大学における医学のトレーニングと同様に、EA への道は専門家になるためには長年の経験や強い意志、勉強、適性が必要となる。

セキュリティ・トラックでは、Sabine Bluckl 氏と Christian Schweda 氏、共に the Technische Universitat, Institute for Informatik が色々な意味合いからリスク管理という言葉がどのように理解されているかについて話した。2人の講演は、“Modeling and Visualizing Enterprise-Wide Operational Risks”というテーマで行われ、ビジネスの継続性を考えていく上で、企業内外でリスク規制をどのように管理しているか疑問を呈した。

今日、リスク管理は組織内でしばしばサイロの中に隔離されている。必要とされていることは、リスク管理はもっと繰り返しと全体的視野で行うべきで4つのステップがある：Plan (計画)、Do (実施)、Check (点検)、Action (アクション)。企業内のより良いドキュメンテーションとコミュニケーションのための1つのアプローチは、現在と将来の展望を明確にし、リスク管理プロセスの計画に役立てることである。アプローチ範囲を管理するための更なる意思決定をサポートするべく評価基準を使用しなければならない。スイス銀行における IT システムの例を使って、2人は、ビジネス・プロセスとビジネス・アプリケーション・レベルを組み合わせた評価基準により、より良いリスク管理のための意思決定支援のシミュレーションができたことを披露した。

以上